

水 非 浦 杉(風 屏 案 圖 ン カ リ ベ

私に畫が描けたらば(二)

磯 萍 水

この月も私は畫が描けたらばの嘶を續けます、然し私は、ただ單に、自分が畫にしたかつたと謂ふ其場合をのみ、思ひ出の儘に並べたてるのでは有りません、私が斯う謂ふ問題を提供したのは、一の目的があつての事です、それはこの談の結果に於て解し得られます。

『山岳家の見たる山の色』を話させよう。然しこれは甚だ難かしいのです、何故と謂ふのに、その色は私が一人感得したのみでして、詞をもつても、文章をもつても、逆もその儘に謂ひ現はせる筈のものでは無いのであります。

三月の十日でした、私の先輩のK君は、一寸した用事で私を尋ねて見えられました、玄關での立話、いづれまたと歸りを急がれました、私は餘りの不意打と、何とも謂ひやうもない失禮をしたやうな氣がして、その儘お別れするのが罪惡のやうに思はれて成りませんでしたので、帽も冠らず、その儘突かけ下駄で外に送り出ながら、K君の家は山一とつ越えて行かれるので、私は話しながらつひぶら／＼と行きました。

胸をつくやうな急な坂を登りきると、だら／＼と小路が蛇のやうに迂練つて居ます、それを傳ひながら行く、私の領分の山は盡きて、ここからはだら／＼の下りになる、私とK君とは並んで歩いて居ました。

晴れた春の日の、没るにはまだ一時間も間がありましたらうか、
『ああ今日は好く見える』

K君はさも嬉しさに謂はれました。

谷戸を三つほど越してその先の丘の上に、新らしく建てられた
小學校の校舎の上に、山が浮いて見えます。私はK君の聲に初
めてそれを仰いで見ました、何の山でしたらう、恐らくは足柄
續きのそれでしたらうか、または彼の山北から入る丹澤山の一
端でしたらうか、實はその時私には、それが何であるかを訊く
の勇氣もなかつたのでした。私は山の話と來たらば全部門外漢
なのですもの、何で此の山博士と太刀討ができません。

『ああ好く見えますね、これは綺麗だ』

全く綺麗だつたのでした、山の人の前でのお世詞では無かつた
のでした。然しそれは一時の暗示に刺撃されての、一種の迷景
的の美に襲はれたのでした。

如何に山らしい山に登つた事のない私でも、山の色はよく解り
ます、ですのに此時の山の色はどう謂ふものでしたらう。

私は畫の具の合せやうを知りませんから、それを畫具で説明は
できませんが、濃い淺黃の、冴えた、冴えた、表面に艶やかな
光澤のある、私が日頃見なれて居る山の色、超然の色とは
全く違ひました。何とも謂ふに謂はれないなつかし味のある色
をもつて居たではありませんか、そして而も、校舎の家根の上
に浮き出して、手でもその顔が撫でられるやうに、近づくとその
呼吸の香りもえるばかりに見えたのでした。實際私にはさう

見えたのでした。

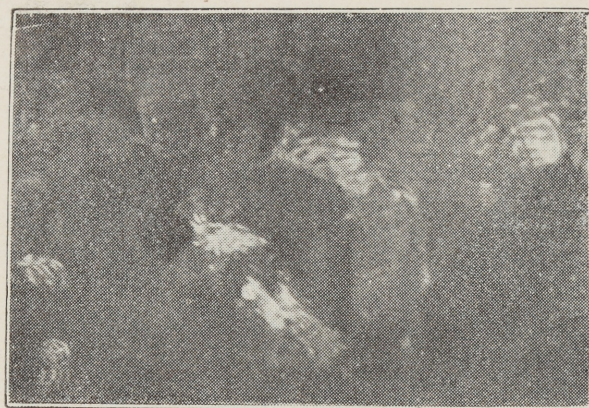
私は、その時は、敢て不思議とも思はなかつたのでした。ただ
美しい山の色とばかり、その原因を考へても見なかつたのでし
た。

お別れしてから、歸りは一人で、また舊の途を歸つて來ました
私は再び先刻山を見た所で、もう一度山を見て見ました。

ものの十分とは經つて居なかつたのでしたが、山の色は暗い淺
黃、と謂はうよりただ暗い、ありきたりの山の色ではありませ
んか、日は未だ春かないのですから、勿論光線の烈しい變化は
ありません、それなのに、何故でせう、山の色は先刻、K君に
謂はれて見た時のやうに、ちか／＼と、色鮮かなものではあり
ません、暗く、陰氣に、人なつかしくない、結局私が日頃見つ
けて居る平凡な色になつて居たではありませんか、私ははつと
思ひました、私は成程と手をうちました。

私はK君に暗示の色を授けられたのだ。私が常からK君を山の
神様のやうに思つて居たのでK君は山の色を教えられて、さて
その時に見た山の色は、あのやうに美しくも、人懐かしくも見
えたのは、あれは吾々の見る山の色では無いのだ。吾々には彼
のやうに、山を美しく、懐かしく見るの權力はもつて居ないの
だ。あれはK君が見る事のできる色なのだ。私はK君の力量に
感化されて、その一刹那に於て一瞬の美と山の情けを味はふ事
ができたのだ。

私は喜びました。計らずも山の眞實の色彩を見る事ができまし



夜汽車(ルテス)片多徳郎

たのを喜びました。

題して『山岳家の見たる山の色』としませう、然し圖なんかはどうでも宜しいのです、森の邊に山が出やうと、河原の當面に山が聳えやうと、かまひません、單に山ばかり描いても差支へは有りません、要は山の色彩を現はすのにあるのですから、然し私は困ります、私の感得した『山の色』は、私の瞳の底に泌み込んで居るのでして、それを斯うと説明する事ができないのです、それにしても忘れられないのは彼の時の山の色であります、私は自家の誇として此『山の色』を深く珍藏します。

『水郷の魔火』と假り題を置きました。此の材料をもつて此篇の結局とします、これは潮來の夜の色を描くのです。

舟に置炬燵があつたのが、先づ私には謂はれない程の嬉しさでした。十二月の中旬すぎ、風が巨魔の嘯きのやうに、間をおいては凄まじく吹き捲ります、それに面を向けては呼吸もつまる程でした、そして寒い事、寒い事、この儘氷り付いて了ふのかと、正直思はずには居られませんでした。その場合、この木枯の吹き荒む水の邊を渡るの夜に、私にはこの炬燵がどんなにか嬉しかつたでせう、私は外套の釦を残らずかけて、襟を立ててただもう意氣地なく炬燵にしがみ付いて居ました。

風が枯芦の邊を吹き渡つて行きます、ざわ／＼と氣味悪い音を立てます、あの怪談にきく障子に觸る髪の毛の音と謂ふのは、斯うした音なのであらう、櫓のきしりが、ぎい／＼、ただそれぎりです、私の天地の間の音と謂ふのは此の二つぎりでした、

私は心底から寂しさを悲しまずには居られませんでした。

船頭は老人で、而も耳が遠いのでした、何を話しても一度や二度では通じません、迎も埒のあくのでは無いのでした、私は會話も諦めて、船宿から寒さしのぎにと乗せてくれた酒を、ちびり／＼と、飲めもしませんのに、實際寒さをしのぎたい計りに嘗めて居りました。

なか／＼潮來に舟は着いてくれない、最初の中はまだか／＼と心を焦だちましたが、いくら待つても舟は着かうとはしません遂に我を折つて、どうとでもなれ、勝手にしろ、一夜中この舟の裡に寝たとて死にもしまいと、失望から樂天になつて、酔つて倒れた方が益だと、自暴と二人連れて頻に盃に親しみました。

盃に月が姿を寫します、風がそれを吹き散します、と突然に、盃が暗くなりました、おやと思ふ間に、また明るくなつて、明るく成つたと思ふと、また忽ち暗くなる。

漸やくの事で私にはその原因が解りました。橋の影です、私の舟が橋の下を通る度に、橋の影が盃にさすので、盃が暗くなる私は非常に詩趣ある事に思ひました。

潮來出島は四十八橋、そんな事ではありません、百橋にも餘りませうか、その橋と謂ふのが、獨木橋のやうなもあれば、棧橋程のものもある。

その面白さに私は、酒は飲まずに、盃にくだ儘、ただ盃中に寫る橋の影、明暗面の白さを見惚れて居りました。

吹きつけられるやうに私は、呼ぶやうな唄ふ聲と、天邊から降つて來たやうな太鼓の音とを聴きました、吃驚しました、今までが餘り寂しすぎたのに、思ひもかけずこの調子の狂はしい音楽をきかされたので、一種の恐怖を感じずには居られませんでした。

風に乗つては、高く、低く、遠く、近く、續いては、絶えて、如何しても魔の樂聲です、私は首を龜めながら四方を眺めました。

舟は一角を折れて、つと川幅の廣い水路に入りました。

私の仰いだ眼に見えたのは何でありましたらうか。

月に隈くまをとられて輪廓がくつきりと、浮び出たやうに明瞭に二階立の家が四五軒、灯が黄色に鈍くとぼつて、煤けた障子のどれも立てきつてある、叫ぶやうな唄と狂はしい太鼓の響きはそれから洩れたのでした。

その時の家の黒い／＼色、凄じいばかりに黒い色、月によつて區劃された輪廓の美しさ、就中私が胸に應えたのはその灯の色でした、煤けた障子の裡の灯火の色、何とも謂ふに謂はれない、鈍い、そして底に魔の潜むらしい色、

私の描いて見たいと謂ふのはこれです、この灯火の色です、私が何を描かうとして居るかは大略お解りに成つたらうと思ひます、暮れ行く山の中の一部、同じ色で塗られて殆んど識別に苦しむ程の線、それは人外魔境への途なのです、山岳を愛好する人の見た山の色、それは百冊の書を読んでも知る事の能きな



私は心底から寂しさを悲しまずには居られません。

船頭は老人で、而も耳が遠いのでした、何を話しても一度や二度では通じません、連も埒のあくのては無いのてした、私は會話も諦めて、船宿から寒さしのぎにと乗せてくれた酒を、ちびり／＼と、飲めもしませんのに、實際寒さをしのぎたい計りに替めて居りました。

なかく潮來に舟は着いてくれない、最初の中はまだかく／＼と心を焦だちましたが、いくら待つても舟は着かうとはしません遂に我を折つて、どうとでもなれ、勝手にしろ、一夜中この舟の裡に寝たとて死にもしまいと、失望から樂天になつて、酔つて倒れた方が益だと、自暴と二人連れて顔に盃に親しみました。

盃に月が姿を寫します、風がそれを吹き散します、と突然に、盃が暗くなりました、おやと思ふ間に、また明るくなつて、明るく成つたと思ふと、また忽ち暗くなる。

漸やくの事で私にはその原因が解りました。橋の影です、私の舟が橋の下を通る度に、橋の影が盃にさすので、盃が暗くなる私は非常に詩趣ある事に思ひました。

潮來出島は四十八橋、そんな事ではありません、百橋にも餘りませうか、その橋と謂ふのが、獨木橋のやうなもあれば、棧橋程のもある。

その面白さに私は、酒は飲まずに、盃についだ儘、ただ盃中に寫る橋の影、明暗面の白さを見惚れて居ました。

吹きつけられるやうに私は、呼ぶやうな唄ふ聲と、天邊から傳つて來たやうな太鼓の音とを聴きました、吃驚しました、今まどが餘り寂しすぎたのに、思ひもかけずこの調子の狂はしい音楽をかきされたので、一種の恐怖を感じずには居られませんして。

風に乗つては、高く、低く、遠く、近く、續いては、絶えて、如何しても魔の樂隊です、私は首を龜めながら四方を眺めました。

舟は一角を折れて、つと川幅の廣い水路に入りました。

私の仰いだ眼に見えたのは何でありましたらうか。

月に隈をとられて輪廓がくつきりと、浮び出たやうに明瞭に二階立の家が四五軒、灯が黄色に鈍くとぼつて、煤けた障子のどれもは立てきつてある、叫ぶやうな唄と狂はしい太鼓の響きはそれから洩れたのでした。

その時の家の黒い／＼色、凄じいばかりに黒い色、月によつて區劃された輪廓の美しさ、就中私が胸に應えたのはその灯の色でした、煤けた障子の裡の灯火の色、何とも謂ふに謂はれない、鈍い、そして底に魔の潜むらしい色。

私の描いて見たいと謂ふのはこれです、この灯火の色です、私が何を描かうとして居るかは大略お解りに成つたらうと思ひます、暮れ行く山の中の一途、同じ色で染まらば殆んど識別に苦しむ程の線、それは人外魔境への途なのです、山嶺を愛好する人の見た山の色、それは百冊の書を読んでも知る事の出来ない



い山岳家獨有の色、死のやうな寂莫から誘ひこまれて見せらばた魔界の黄な灯火、私はただ、其刹那が描きたいのです、その一瞬に感じ得た色彩をその儘畫に現はしたいのです、私は氣分を尊びます、氣分の畫が欲しいのです、ただ圖の構へや色がすぐ塗つてあるのは望みではありません、畫を通して筆者その時のムードが觀る者の胸に應えさへすれば私は満足します。

私に畫が描けたらば、私は終末に至つて此自問を自答します、私は氣分の畫が描きたいのです。

●美術審査委員

文部省開設の第六回美術展覽會出品の美術審査委員は廿一日左の如く仰付けられたり

▲第二部(西洋畫) 醫學博士文學博士森林太郎(主任)、黒田清輝、男爵岩村透、松岡壽、久米桂一郎、岡田三郎助、和田英作、鹿子木孟郎、吉田博、中村不折、中澤弘光、山本森之助、小山正太郎、中川八郎

▲第三部(彫刻) 高村光雲(主任)、石川光明、竹内久一、白井保二郎、長沼守敬、新海竹太郎、大熊氏廣、米原雲海、山崎朝雲、

青木繁氏の畫を見た時

矢代 幸雄

忘れもしない、彌生廿六日の午后赤城君と後藤君と、それから僕とは、東台の花を外に、此人の繪を見に行たのであつた。新聞や雜誌で、天死したる天才であると聞いた丈、僕は其他に何も青木氏に就て知らなかつたから、別に特殊な期待を持たず漫然誘はれたを幸ひに、ポカンと來たまでであつた。そして、僕は駭いてしまふのであつた。

西洋畫家の日本畫と云ふ嚴かめしい名の下に、コマ畫を擴げた様な、人を馬鹿にした、ぞんざいな代物に、賣れそうな安價をぶらさげて、目まぐるしきまで遠慮會釋なく曝して居る廊を廻つて行くと、此度は新歸朝者の作品。多少、呼吸を吹返して田舎者の東京見物の様にキョク、して進むと、最後の暗い室に：：僕は思はず身顫ひをして、軀が硬くなつてしまつた。胸には亂調子の動悸までして、動くのが厭になつた。

今迄喋つて居た僕も、口をきけなくなつた。赤城君は元來黙つてる男である。皆んなは別々になつて、各が向きに繪を眺めた。

噫青木君。如何なれば、君は斯くまで眞面目であつたか。輕佻浮薄、滔々として世に漲り、人或は世に媚び、阿諛物に戀々身世を忘れて、感激の赴く儘に、突進踴躍す可き藝術界すら、勸工場然たる展覽會に、手頃な賣れそうな畫計り列べる世の中